



絶滅危惧種：植物園での育成と展示



大阪市立大学理学部附属植物園では、近畿地方に生育する種を中心に、絶滅危惧種を園内で育成・増殖させ、一部を園内の「西日本絶滅危惧植物」エリアで公開・展示している。今回、このエリアの植物をいくつか紹介する。

日本人に馴染みの深い身近な植物が絶滅危惧種となっている。秋の七草は、山上憶良が万葉集で詠んだ歌「秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花」に由来し、オミナエシ(写真1)、ススキ、キキョウ(写真2)、ナデシコ、フジバカマ(写真3)、クズ、ハギの7種が該当する。これらは里山で普通に見られた植物だが、開発などによる里山の消失とともに数が激減しており、キキョウとフジバカマは環境省のレッドリストに掲載されるに至っている。

沖縄諸島の東にある北大東島と南大東島だけに生育するアラゲタデ(写真4)とダイトウサクラタデ(写真5)の増殖にも取り組んでいる。この2種は「絶滅のおそれのある野生動物の種の保存に関する法律(種の保存法)」によって採取や譲渡などが禁止されている。当園は、こ

の両種の育成・増殖を推進していく施設として、2018年に環境省から全国の植物園で初めて「認定希少種保全植物園」に認定された。

近年はシダ植物の保全にも積極的に取り組んでいる。オオミネイワヘゴ(写真6)は、大峰山の南に位置する奈良県下北山村で1954年に初めて発見されたシダ植物である。しかし、最初の発見場所はダムの造成により水没してしまい、現在、自生が確認されている場所は奈良県と三重県で1ヶ所ずつとなっている。

ヒメイノモトソウ(写真7)は石灰岩の岩壁に着生するシダ植物で、奈良県川上村などのごく限られた場所に分布し、絶滅の危機に瀕している。2018年と2019年に自生している株から胞子を採取して、園内で増殖を試みている。

溪流沿いの岩壁に着生する種や湿地に生育する種についても、様々な栽培条件を検討しながら育成に取り組んでいる。特殊な環境に生育する種は、自生地の消失が種の絶滅に直結する。育成・増殖が困難な種も多いが、栽培方法を確立し、いずれはこのエリアに展示したいと考えている。
(理学部附属植物園 厚井 聡)



140周年展と大学史資料館(大学博物館)実現にむけてご寄附のお願い →大阪市立大学夢基金
お申込み時にTOP1「創立140周年記念事業」を選択してください
【お問い合わせ】大学サポーター交流室(夢基金担当) TEL06-6605-3415
<https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/about/fund/xbtf2s>

編集発行
(仮称)大学史資料館設立準備委員会
学術情報総合センター6階 大学史資料室内
TEL: 06-6605-3261

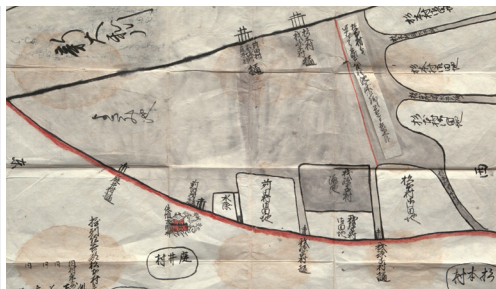
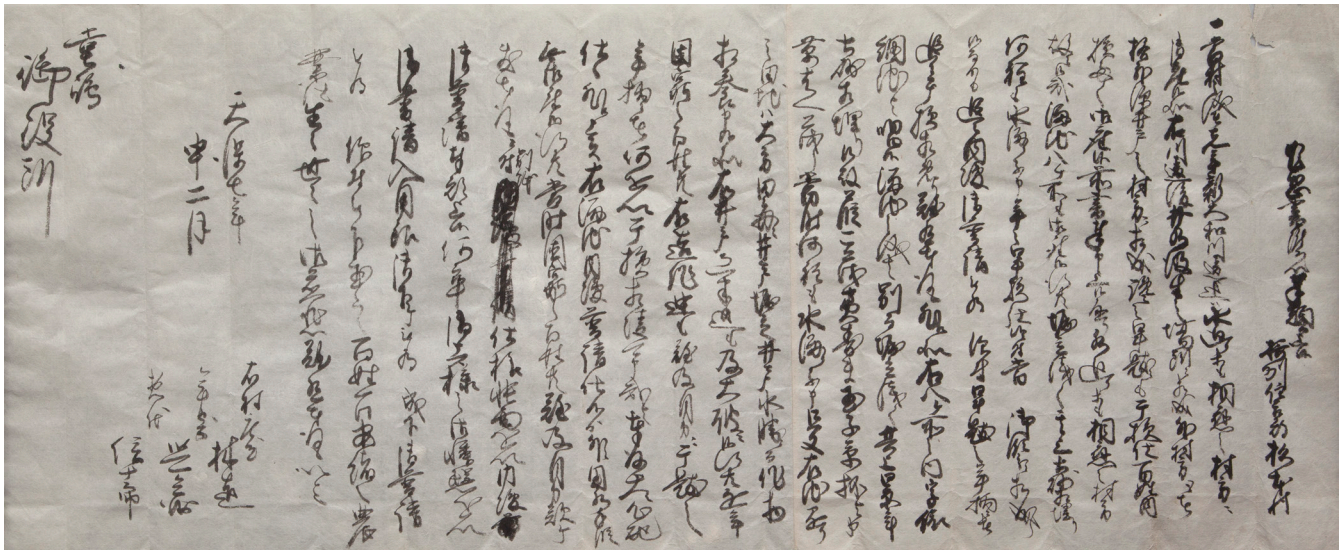
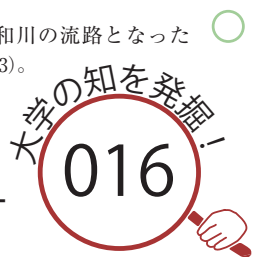


写真1 (上)：ため池（依網池）の池さらえに関する嘆願書（控え）（天保7年・1836）。杉本村が領主に願ひ出たもの。

写真2 (左下)：杉本村の検地帳（延宝7年・1679）。

写真3 (右下)：新大和川の流路となった依網池（享保8年・1723）。



古文書からたどる江戸時代の杉本村—山野家文書—

大阪市立大学杉本キャンパスが立地する「杉本町」という町名は、大正14年（1925）から使用されているが、江戸時代には「摂津国住吉郡杉本村」と言った。杉本村時代の庄屋家の一つに山野家がある。大学史資料室は、2014年に山野家旧蔵の古文書群の寄託を受けた（後に寄贈）。他に、本学が古書店から購入した文書を合わせると当室収蔵の山野家文書は合計1000点以上にのぼる。

文書群のうち、延宝7年（1679）の杉本村検地帳（検地による土地調査の結果を記した土地台帳）、慶応4年（1868）の高札（法令を墨書した立札）などは目を引くものである。検地帳は家紋入りの箱に納められ（写真2）、特に大切に扱われてきたことがうかがえる。他に、御用留（伝達文書の留め書き）、様々な願書の控え、年貢関係の勘定帳などがある。点数が多いものでは、約250通の年貢免状（年貢割付状）、皆済目録（年貢の完納証明書）、200冊以上の宗門人別改帳（宗門改めに基づいて毎年作成された戸籍簿）がある。同文書群はかつて『依羅郷土史』（1962）刊行の際、経済学部教員だった山崎隆三氏により調査されてい

る（依羅とは、杉本ほか5地区を含む近代行政村）。

願書控えの中には、凶作や旱損（日照りによる田畑の損害）を領主に訴えたものが数十点見られ、当時の様子を知るよすがとなる。写真1は、天保7年（1836）作成の、ため池の池さらえの嘆願書である。杉本村庄屋（（山野）林蔵）、年寄、惣代の村役人3名から堂島役所に宛てたものである（当時杉本村は小田原藩領で、堂島に藩の蔵屋敷があった）。宝永元年（1704）に行われた大和川の付替えについて、冒頭に「当村は新大和川への川違えまでは水回りも相応だったが、その後は他村より格別に深い井戸が必要な旱損の地となった」と窮状を訴えている。「村内のため池はいずれも浅く、特に浅い依羅池（依網池）は土砂で埋まり草が茂り、水も溜まらない。もはや池浚えの他に田地の用水確保手段がない。仕様帳（見積書）を作るのに必要な経費を頂きたい」と願ひ出ている。新大和川による水利事情の悪化、深掘りを要した井戸、土砂に草が茂る依網池の現状、対応のため動く村役人など、当時の村の生活が伝わってくる。（大学史資料室 田中ひとみ）



準備室だより

- ◆140周年展にむけて、大学史・文系（遺物・古文書など）・理系（化石・地質・古人骨など）・展示設計のワーキンググループで、実施設計を進めています。
- ◆大阪市立大学ホームページの創立140周年記念特設サイトに、「【大学史資料館】の設立をめざして」が公開されています。140周年展および大学史資料館の準備状況の報告や、『NEWS LETTER』などを順次掲載していきます。ぜひご覧ください。
- ◆この『NEWS LETTER』は、大阪市立大学 学術情報総合センター ホームページの学術機関リポジトリでも公開しています。「大学史資料館」で検索してください。

（仮称）「大学史資料館」設立 準備委員会からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→学術情報総合センター6階 大学史資料室内 TEL：06-6605-3261